

「みんなでまこう! 繋がり・繋がる 幸せネットワークの種」プロジェクト

竹内 淳子 ●じゅんちゃん一座 座長(代表)



じゅんちゃん一座メンバーによる寸劇

1. 背景と目的

市民からの「寸劇を見て認知症を勉強したい」という声を受け、十和田市立中央病院精神科の医師である竹内淳子(以下「座長」)が、地域の市民、保健師、介護支援専門員らに声をかけ、寸劇を用いて認知症の普及啓発を行うボランティア団体「じゅんちゃん一座」(以下、一座)を2011年12月1日に立ち上げた。

一座は、精神科医による専門的な講義と、ユーモアとなじみのある方言を用いた寸劇を組み合わせた公演を行うことで、①子どもから高齢者まで全世代のひとが認知症を支える人になること(人づくり)、②公演を媒介として、警察、銀行、学校、地域見守り隊など多くの社会資源と顔の見える関係になることで、認知症を支え合う地域を作ること(地域づくり)、③一座の公演を通じて得た地域づくり、人づくりのノウハウを多地域・広域へつなげて「地域まるごと」で取組む地域を増やすことを目的とする。

2. 取組みの方法／期待される成果

公演は、全世代が楽しみながら認知症を学ぶことができるようにエデュテイメント(エデュケーション+エンターテインメント)の手法を用いている。さらに公演を通じて、医療介護関係者

と共生社会実現を主導していくであろう一般市民との顔の見える関係づくりを行い、共生社会の実現に向けた地域づくり・人づくりも行っている。

この活動を『多地域・広域』に広げることを目指し、一座は出前公演を行い、併せてその土地の各事業者や地域の方々と、公演の趣旨、公演対象、広報手段、公演後の地域での取組みを話し合い、公演開催前から公演後の地域に根ざせる繋がり・繋がるネットワークづくりを行う。

8年間で198回の公演を行ってきたことで、「認知症と共生する地域」を実現するための課題が地域によって様々であることを実感した。そこで一座は、認知症の普及啓発のみならず、地域の現状に合わせた認知症対策の支援、行政や介護などの関係者の顔の見える関係づくり、モチベーションが低下しがちな関わる人たちのエンパワーメントを行うため、今まで以上に積極的に「出前講座」を行うとともに、地域において継続した認知症対策(認知症と共生する地域づくり)が進むように働きかける。

この「地域まるごと」の取組みを「多地域・広域」に広げ、一人ひとりの行動変容が地域の環境変容となり、認知症になっても住みたいところで安心して暮らせる地域づくりに繋げる。